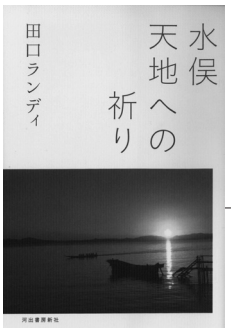
書評



田口ランディー著
『水俣　天地への祈り』を読んで浮かぶこと

河出書房新社、2021年 9 月

評者　高倉　敦子
ガイアみなまた

水俣というのは不思議なところだと、別にこの本にそう書かれているわけではないが、読み終わるとなにかそんな気持ちにさせられる。水俣に助けられているという感覚。あの時、田口さんは和服姿で現れた。2004年 8 月28日、水俣湾水銀ヘドロ埋め立て地にて、石牟礼道子さんの台本による新作能「不知火」奉納の舞台。私は実行委員のひとりとして、当日の天候だけが気がかりだった。続々と集まってくる観客（立会人）をどうやってスムーズに会場に誘導するか、スタッフが旗を持って案内するその列の中に、田口さんはいた。初めてチッソの人にも参加を呼びかけた記念すべきその日。

100％の雨予報、おまけに台風の接近中。埋め立て地でやれるのかやれないのかの最終判断を託されたのが漁師の緒方正人さんだった。その答えは「予定通りあの場所でやる」であり、まさにその言葉の通りに奉納が終わるまで雨は一滴も降らず、月まで出て、終わると待ちかねたように一気に降り始めた。まるで結界でも張られているように、埋め立て地の上だけ晴れていた。「奇跡ってあるんだね」と、そういうものを信じない夫がつぶやいた。「ただならぬものを感じました」とは道子さんの言葉。私はとんでもないところに立っていた。

漁師の杉本栄子さんと緒方正人さんがいて、田口さんの水俣行脚は二人の祈る姿に出会ったことから始まる。全ては出会いから。「遅れてやってきた水俣」という田口さんの表現。でもその時でなければすくい取れなかった言葉たちがひとりの作家を待ち受けていた。二十代の頃に石牟礼さんの「苦界浄土」に出会っていながら、水俣には近づけなかった人が二十年かかって水俣に現れ、二人の心の内を聞き取り、本にした。そこにはユージン・スミスという人間像も新鮮に描かれている。水俣病事件とは自分自身を映す鏡のようなものであり、吐いた言葉が自分に向かってくることがある。直視するのが痛い。思いがけず他者に届くこともあれば届かないこともあり、苦しくなる。あまりに理不尽なことが続くと狂いたくもなる。

44年前、私は旅の途中で水俣に立ち寄り、そのまま水俣病センター相思社の一員として10年間お世話になった。正人さんとはその頃、水俣病認定申請患者協議会の活動の中で出会うことになる。行動の先頭に立つのが当時の理事長でもある川本輝夫さんだった。勉強不足の私はいきなりの水俣病闘争の拠点での共同生活、運動との両立にもがいたりする日々が続き、

そもそもなぜ私は水俣にいるのだろう？　という心の声と表看板に押しつぶされそうな自分がいた。そんな時、軟弱な支援者を助けてくれたのが水俣病で苦しむ人たちであり、尊敬する漁師と、この大地だった。

正人さんは運動の中での自分自身の違和感に気がつき狂い始めたという。新参者の私にその方向性への疑問を打ち明け、どう思うかと問われたが答える術もなく、その苦悩を当時はわかろうとしなかった。何かに取り憑かれたようによろけながら歩いている姿を見た時には、声をかけることもできなかった。認定制度に閉じ込められ縛られ苦しむ数え切れない命が後ろに続いていることを、抗う正人さんに見てしまった。

闇の中にこそ光はさすのだろうか。ある日のこと、実にあっけらかんと「あそこを寺にしたいと思ってる」と突然というより長い長い自問自答の末に正人さんが言った。もちろんそれはお寺を建てるということではなく、水銀ヘドロ埋め立て地が人々に菩提心を起こさせるような役目を果たし、祈りを捧げる場所になることを願ってそう言ったのだ。貶め合うことを終わらせていこうとした。「水俣病は自分の守護神である」と言う栄子さんは、正人さんの守護神でもあった。栄子さんは沖縄のノロさんのような雰囲気があり、時には何を言われるかわからない緊張感をはらむ。前後の脈絡がないまま「高倉さんと屋久島に行く」。えっ？いきなりどういうこと？　今思えば起死回生の松明（たいまつ）のような人だった。押さえて蓋をしていた記憶がよみがえり噴き出して止まらなくなる。水俣に助けられている。つまりはこれがのさりなのか。

埋め立てられた命の苦しみ、怨み、人のねたみ、切り刻まれた心、むしばまれる体。こんな理不尽をいつまで強いられるのか？　密かに心に願ったことがたったひとつある。「魂の底から喜び踊るまつりがしたい」。苦し紛れに出てきた言葉。人は何をもって本当に救われるのか。言葉とは本来祈りのようなものだった。原初の心をつかみ取って表現しようとした田口さんも祈りの人。私にできることは私の感じた水俣を彼女に見てもらうことだった。いよいよ2025年は水俣病公式確認から70年という節目。ここまで来たらもう反転するしかないではないか。書評というより、願わくば自分自身の声で歌い、踊り、誰もが命輝かさんことを。